

資料

医療機関での実習における大学生の自己開示に対する考え方 － 個人情報の内容および学年別での比較 －

武井祐子*¹ 中村有里*¹ 高尾堅司*¹ 水子 学*¹ 山田了士*^{1,2}

要 約

本研究の目的は、心理専門職としての大学教育を受けている学生に対し、専門職側の個人情報の患者への自己開示に対して、抵抗を感じるか否か、また実際に行うと考えるか否かについて、専門教育を受ける期間の長さから検討することである。

医療現場の実習において患者Aから尋ねられた14の回答者自身の個人情報を開示することに抵抗感の有無、開示するか否かについて尋ねる質問紙を実施した。

分析の結果、自身の個人情報を開示することへの抵抗感や、実際に開示するか否かという判断は個人情報の内容によって異なり、また専門教育を受けるなかで意識や行動が変化する場合とそうでない内容があることが明らかとなった。

1 緒言

自己開示とは、自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為であり、自分自身や自分自身の経験に直接言及する言表、あるいは自分自身がにじみ出るような発言である¹⁾。このうち、自分自身に直接言及する内容としては、家族のことや出身地、住所や電話番号という個人的な情報が含まれると考えられる。

他者から個人的な情報を明かされると、私たちは相手に信頼され、尊重されていると感じ、相手に対してより親密感を抱くようになる²⁾。私たちは関心のある他者と親密な関係を築くために、相手に自身の個人的な情報について伝えると考えられる。つまり、私たちが他者に自己開示することと他者から私たちが自己開示されることは、親しい人間関係を形成し、維持するために重要と考えられる。

齊藤は複数の研究結果から、トラウマやつらい出来事に関する自身の深い感情を自己開示することは、自己開示した当人にとって精神的な健康面で利点をもつことを指摘している²⁾。また、自己開示することは、苦しい出来事にまつわる罪や恥の感情を軽減し、その情報を開示することができたという理

由で、自分を肯定的にみることを助けることも指摘している²⁾。つまり、自己開示によって、自身の精神的な健康が改善されるだけでなく、自尊心を高めることができると考えられる。

自己開示することは、自己開示された他者が示す反応によって、社会的な利点をもたらされる²⁾。自己開示は自身の状態を他者に伝えることであり、たとえば自身がつらい状況にあれば、その状況を他者に知らせることになる。自己開示した人自身がつらい状況を他者に知らせることで、問題解決のための情報や実際的な手助けを得るなどの手段的なサポートが得られたり、励ましなどのサポートを得ることが可能となる。つまり、自己開示することは、他者からのなんらかの社会的なサポートを得る手段になりうると考えられる。

自己開示には様々な利点があるが、私たちが他者に自己開示をする時に、その相手が誰であるか、あるいは自身にとってどのような関係にあるかといった他者の属性を考慮することなく、一方的に他者に自己開示することはない。男性か女性かといった他者の性別や友人か知人かといった相手との親密性の度合いによって自己開示の度合いは異なる^{1,3,4)}。自

*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科 *2 川崎医科大学
(連絡先) 武井祐子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail: takei@mw.kawasaki-m.ac.jp

己開示する当人と自己開示される他者は、互いに、何を、いつ、どこで、どのように伝えあうかを決定し、また個人的な感情や互いの関係についての気持ちを明かすのかどうかも決める²⁾。つまり他者に自己開示するかどうかは、相手との関係性のなかで、自己開示する側とされる側の相互の判断によって決められると考えられる。

医療や福祉の臨床現場において、患者や利用者が、専門的な支援を受ける時、支援者に対する患者や利用者の自己開示は重要と考えられている。臨床現場での支援者とは、医師や看護師、作業療法士や理学療法士、言語聴覚士、臨床心理士、生活支援員や介護福祉士などをさす。いずれの支援者も患者や利用者とは直接的な関わりをもつ。患者や利用者が治療に主体的に関わっていくためには、患者や利用者が自身のどのようなことでも支援者に遠慮なく相談し、疑問に感じたことを質問したり、相談できる環境作りが重要と考えられる。

患者や利用者が支援者に質問したり、相談できる環境作りのために、たとえば、看護師においては、対人関係能力として看護師側からの自己開示が重要である³⁾。患者との関係において、患者への自己開示が高い人は患者からの自己開示を豊富に引き出しやすい⁵⁾。さらに、看護師の自己開示は、適切に活用されれば、患者の不安や孤独感が軽減するとされている³⁾。つまり、患者との治療関係のなかで、看護師が積極的な自己開示を行っていくことは重要であると考えられている。

将来看護師になるために学んでいる看護学生が患者に対して自己開示する傾向は、学年があがるについて高まる⁶⁾。つまり、専門教育や臨床現場での実習のなかで、自身が自己開示することの重要性について学ぶことで、その意識が高まり、患者に対して自己開示する傾向が高くなると考えられる。しかし、その一方で、看護師自身は自己開示の活用に戸惑うなどの問題点が指摘され、看護職における教育の必要性が指摘されている⁵⁾。

看護師と同様に、セラピストの自己開示とクライアントの自己開示には正の相関関係があり、面接回数が進むにつれ相関関係は強くなると言われている¹⁾。心理専門職は、セラピストやカウンセラーという立場で、患者やクライアントに心理的な支援をする。クライアントが自己開示することは、カウンセリングが成立するための前提条件であり、カウンセリングの進行に伴って自己開示の機会は増える¹⁾。しかし、クライアントの自己開示を引き出すには、セラピストやカウンセラーの自己開示よりも、クライアントの問題に深く入ることができる技法を

用いる方が有効であり、セラピストが自己開示することは適切でないと指摘されている¹⁾。集団心理治療においても、セラピストの自己開示よりも、クライアントが話すように誘導されるなどした方が有効であると指摘されている¹⁾。また、セラピストの自己開示は、専門家として期待される役割像からの逸脱を意味し、クライアントから援助能力がないとみられたり、セラピストが精神的に不健康とみなされる¹⁾。つまり、セラピストやカウンセラーが自己開示することは、看護師と違い、治療上必ずしも適切とはいえないと考えられる。

自己開示は一般的には利点が多いと考えられている。しかし、医療や福祉の現場での支援者と患者や利用者との関係では、看護専門職で奨励されることはあっても、心理専門職においては必ずしも適切とはされていない。特に心理療法の流派によっては、中立性や匿名性が優先され、セラピストがクライアントに個人情報を開示することの危険性が強調されている⁷⁾。専門職としての立場にある人が自己開示することが適切かどうかは、その専門性の違いだけでなく、判断する際に基準となる考え方に相違があると考えられる。

心理専門職の職業的倫理においてセラピストやカウンセラーの自己開示は適切でないと考えられている。倫理的問題の有無を判断する際に必要な基準として職業倫理の7原則がある⁸⁾。7原則における第3原則で相手を利己的に利用しないためには多重関係を避けることが重要とされているが、多重関係と自己開示は強く関連している。

多重関係とはセラピストが、専門家としての役割とそれ以外の明確かつ意図的に行われた役割の両方の役割をとっている状況をさす。クライアントの福祉を最大限向上させるためには、セラピストはクライアントと個人的な関係を結んだり、利害が対立するような関係に陥ることがあってはならない。セラピストがクライアントに自己開示することは、両者の関係にセラピストの日常や人となりや反映される。その結果、クライアントがセラピストに対して友人や恋人などの立場を期待し、通常の専門的関係以外の関係や役割が加わる恐れがある。クライアントがカウンセリング場面以外の生活場面でセラピストと接する可能性を実感すると、クライアントはカウンセリング場面で話す内容が自分の日常生活に関わってくるのではないかと混乱し、十分な自己開示ができなくなるおそれがある。

一般的に、看護専門職では推奨されている支援者側の自己開示は、心理専門職においては治療上からも倫理上からも適切とはいえない。効果的な心理的

支援を実現するには、クライアントによる十分な自己開示を妨げるリスクを最小限にとどめる必要がある。無論、倫理的にもセラピストの自己開示は控えられるべきと考えられる。セラピストが自己開示することは、セラピストとクライアントという枠組みから逸脱した情報を提供し、本来あるべき心理治療の関係とは異なる関係を生み出す可能性がある。したがって、心理専門職者は、支援者側からの患者や利用者、クライアントに対する個人情報の開示には慎重であるべきだと考えられる。

心理専門職として患者や利用者であるクライアントに支援を行っていくためには、自身の自己開示の適切性についてより強く意識し、その是非について理解しておく必要がある。殊に、心理専門職を養成する教育機関においては、心理専門職を目指す学生が、安易な自己開示が招く事態を知り、適切な自己開示を自律的に選択できるよう指導することが求められる。一般的には、心理専門職を養成する教育機関は、学年が上がるにつれて心理臨床の現場を想定した様々な専門教育を学生に提供している。学年が上がる過程で学生が確実に心理専門職者としての学びを深めているとすれば、上級生は下級生に比して、自己開示について慎重な姿勢をとるようになるだろう。

本研究は、心理専門職として大学教育を受けている学生が、専門職側の個人情報の開示に対して、どのようにとらえられているかを明らかにする。特に、専門教育を受けている学生が、患者への自己開示を行うことについて抵抗を感じるか否か、また実際に行うと考えるか否かについて、専門教育を受ける期間の長さとしての学年による違いが確認されるか否かを検討する。

2 方法

2.1 調査の手続きおよび調査対象者

本調査は、2012年3月から5月にかけて、臨床心理学を専攻する大学生 (n=317) を対象に講義等の時間を利用して、質問紙調査を実施した。調査に際して、調査担当者は本調査の目的と調査の協力は任意であることについて口頭で説明した。質問紙にも同様の内容を記載した。説明の後、調査者が一斉に質問紙を配布し、その場で回答を求めた。回答が確認できた時点で、調査者が個別に質問紙を回収した。回答に要した時間は約20分であった。

調査対象者は、317人 (男性105人、女性211人、不明1人)、平均年齢は20.0歳 (SD3.72) であった。調査対象者の学年の内訳は、1年生は83名、2年生は74名、3年生は79名、4年生は81名であった (表1)。

表1 対象者の学年・性別の人数内訳

	男性	女性	不明	合計
1年	33	50	0	83
2年	20	54	0	74
3年	27	51	1	79
4年	25	56	0	81
合計	105	211	1	317

調査対象者が在籍する学科のカリキュラムは、学年が上がるにつれて臨床心理学の専門科目を受講する機会が増える構成になっているため、上級生ほど心理臨床の現場における適切な態度が学べていると考えられた。

2.2 質問項目

2.2.1 属性項目

学年、性別、年齢などを記入するよう求めた。

2.2.2 自己開示 (伝達) に対する抵抗感および伝達 (自己開示) の有無に関する項目

回答者自身が医療現場で実習し、そこでの患者とのやり取りが行われた場面を想定した以下の文章を用意した。

「あなたは実習生として、学外の病院に実習に行くことになりました。実習期間中、あなたは実習先を利用している障害や病気をもっている方々とともに1日を過ごすことが予想されています」

この仮想場面に対して、「実習初日、あなたが1人していると、患者Aさんが声をかけてこられました。そして、あなたはAさんに以下の内容についてたずねられました」という場面を設定し、複数の個人情報 (計14:『氏名』、『生年月日』、『下宿先の住所』、『帰省先の住所』、『帰省先の電話番号』、『携帯の電話番号』、『パソコンのメールアドレス』、『携帯のメールアドレス』、『アルバイトをしている場所』、『家族構成』、『所属する大学・学科、出身校 (小学校・中学校・高等学校)』、『趣味』、『好きな芸能人』) を挙げ、それぞれについて自己開示 (伝達) に対する抵抗感を「抵抗なし」「抵抗あり」の2件法で回答を求めた。さらに、仮想場面において、回答者自身が実際に自己開示するか否か (個人情報の伝達の有無) について、「伝える」、「伝えない」の2件法で回答を求めた。

2.3 分析方法

調査実施時期の都合上、調査対象者の1年生は講義および実習も未履修の状態であった。2年生は基礎心理学系の専門科目のうち講義および実習科目を既履修、3年生は2年次までの既履修科目に加えて臨床心理学系の専門科目 (講義) を既履修、4年生は3年次までの既履修科目に加えて、臨床心理学系の専門科目 (講義・実習) を既履修であった。そこで、臨床心理学系の専門科目について未履修の下級生

(1年生と2年生)と、既履修の上級生(3年生と4年生)の計2群で自己開示に関わる項目に対する抵抗感および伝達の有無との関連について分析することにした。自己開示に対する抵抗感および伝達の有無について、下級生と上級生の間に違いが確認されるか否かを分析するため、 χ^2 検定を行った。なお、期待度数が5以下のセルがある場合は、フィッシャーの直接確率検定を用いた。

統計処理は、SPSS Statistics 19を用いて行った。

3 結果

3.1 自己開示に対する抵抗感の有無

患者Aさんが尋ねる14の内容(個人情報)について、患者Aさんに伝えることに「抵抗なし」「抵抗あり」と答えた人数をまとめたものが表2である。

分析の結果、『携帯の電話番号』、『パソコンのメールアドレス』、『携帯のメールアドレス』、『出身校(小学校・中学校・高等学校)』において、統計的に有意に上級生の方が下級生よりも患者Aさんに伝えることに「抵抗なし」と答えた人数が少なく、「抵抗あり」と答えた人数が多かった。(『携帯の電話番号』： $\chi^2(1) = 4.968, p < .05$, 『パソコンのメールアドレス』： $\chi^2(1) = 5.426, p < .05$, 『携帯のメールアドレス』： $\chi^2(1) = 7.552, p < .01$, 『出身校(小学校・中学校・高等学校)』： $\chi^2(1) = 6.485, p < .05$).

『携帯の電話番号』は、「抵抗なし」と答えた下級生が34人(23.6%)、上級生が20人(13.0%)、「抵抗あり」と答えた下級生が110人(76.4%)、上級生が134人(87.0%)、『パソコンのメールアドレス』は、「抵抗なし」と答えた下級生が40人(30.8%)、上級生が25人(17.9%)、「抵抗あり」と答えた下級生が90人(69.2%)、上級生が115人(82.1%)、『携帯のメールアドレス』は、「抵抗なし」と答えた下級生が45人(31.9%)、上級生が25人(17.2%)、「抵抗あり」と答えた下級生が96人(68.1%)、上級生が120人(82.8%)、『出身校(小学校・中学校・高等学校)』は、「抵抗なし」と答えた下級生が138人(94.5%)、上級生が122人(84.7%)、「抵抗あり」と答えた下級生が8人(5.5%)、上級生が22人(15.3%)であった。

3.2 伝達の有無

患者Aさんが尋ねる14の内容(個人情報)について、患者Aさんに「伝える」「伝えない」と答えた人数をまとめたものが表3である。

分析の結果、『携帯の電話番号』、『パソコンのメールアドレス』、『携帯のメールアドレス』、『出身校(小学校・中学校・高等学校)』において、統計的に有意に上級生の方が患者Aさんに伝えることに「抵抗なし」と答えた人数が少なく、「抵抗あり」と

表2 自己開示に対する抵抗感の有無

質問項目(伝える項目)	抵抗なし	抵抗あり	合計	$\chi^2(df=1)$
1 『氏名』				3.073
下級生	152 (100)	0 (0)	152 (100)	
上級生	154 (96.9)	5 (3.1)	159 (100)	
2 『生年月日』				0.006
下級生	139 (93.9)	9 (6.1)	148 (100)	
上級生	147 (93.0)	11 (7.0)	158 (100)	
3 『下宿先の住所』				0.027
下級生	32 (24.6)	98 (75.4)	130 (100)	
上級生	32 (23.0)	107 (77.0)	139 (100)	
4 『帰省先の住所』				0.011
下級生	30 (22.1)	106 (77.9)	136 (100)	
上級生	34 (23.3)	112 (76.7)	146 (100)	
5 『帰省先の電話番号』				1.738
下級生	17 (11.5)	131 (88.5)	148 (100)	
上級生	10 (6.5)	144 (93.5)	154 (100)	
6 『携帯の電話番号』				4.968*
下級生	34 (23.6)	110 (76.4)	144 (100)	
上級生	20 (13.0)	134 (87.0)	154 (100)	
7 『パソコンのメールアドレス』				5.462*
下級生	40 (30.8)	90 (69.2)	130 (100)	
上級生	25 (17.9)	115 (82.1)	140 (100)	
8 『携帯のメールアドレス』				7.552**
下級生	45 (31.9)	96 (68.1)	141 (100)	
上級生	25 (17.2)	120 (82.8)	145 (100)	
9 『アルバイトしている場所』				1.043
下級生	90 (69.2)	40 (30.8)	130 (100)	
上級生	105 (75.5)	34 (24.5)	139 (100)	
10 『家族構成』				1.074
下級生	139 (90.8)	14 (9.2)	153 (100)	
上級生	134 (86.5)	21 (13.5)	155 (100)	
11 『所属する大学・学科』				0.103
下級生	150 (97.4)	4 (2.6)	154 (100)	
上級生	148 (96.1)	6 (3.9)	154 (100)	
12 『出身校(小学校・中学校・高等学校)』				6.485*
下級生	138 (94.5)	8 (5.5)	146 (100)	
上級生	122 (84.7)	22 (15.3)	144 (100)	
13 『趣味』				1.510
下級生	153 (99.4)	1 (0.6)	154 (100)	
上級生	150 (96.8)	5 (3.2)	155 (100)	
14 『好きな芸能人』				0.000
下級生	146 (98.0)	3 (2.0)	149 (100)	
上級生	148 (98.0)	3 (2.0)	151 (100)	

注2) * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表3 伝達の有無

質問項目(伝える項目)	伝える	伝えない	合計	$\chi^2(df=1)$
1 『氏名』				0.000
下級生	156 (99.4)	1 (0.6)	157 (100)	
上級生	158 (99.4)	1 (0.6)	159 (100)	
2 『生年月日』				0.947
下級生	145 (93.5)	10 (6.5)	155 (100)	
上級生	142 (89.9)	16 (10.1)	158 (100)	
3 『下宿先の住所』				0.158
下級生	39 (25.7)	113 (74.3)	152 (100)	
上級生	45 (28.3)	114 (71.7)	159 (100)	
4 『帰省先の住所』				1.338
下級生	35 (22.6)	120 (77.4)	155 (100)	
上級生	46 (28.9)	113 (71.1)	159 (100)	
5 『帰省先の電話番号』				2.589
下級生	15 (9.6)	141 (90.4)	156 (100)	
上級生	7 (4.4)	153 (95.6)	160 (100)	
6 『携帯の電話番号』				13.497***
下級生	41 (26.6)	113 (73.4)	154 (100)	
上級生	16 (10.0)	144 (90.0)	160 (100)	
7 『パソコンのメールアドレス』				14.652***
下級生	48 (32.0)	102 (78.0)	150 (100)	
上級生	21 (13.2)	138 (86.8)	159 (100)	
8 『携帯のメールアドレス』				13.840***
下級生	51 (33.1)	103 (66.9)	154 (100)	
上級生	23 (14.6)	135 (85.4)	158 (100)	
9 『アルバイトしている場所』				0.036
下級生	105 (67.7)	50 (32.3)	155 (100)	
上級生	111 (69.4)	49 (30.6)	160 (100)	
10 『家族構成』				0.501
下級生	144 (92.3)	12 (7.7)	156 (100)	
上級生	143 (89.4)	17 (10.6)	160 (100)	
11 『所属する大学・学科』				0.000
下級生	152 (97.4)	4 (2.6)	156 (100)	
上級生	155 (97.5)	4 (2.5)	159 (100)	
12 『出身校(小学校・中学校・高等学校)』				10.131**
下級生	146 (94.2)	9 (5.8)	155 (100)	
上級生	131 (81.9)	29 (18.1)	160 (100)	
13 『趣味』				0.338
下級生	152 (97.4)	4 (2.6)	156 (100)	
上級生	152 (96.5)	7 (4.4)	159 (100)	
14 『好きな芸能人』				2.080
下級生	150 (96.8)	5 (3.2)	155 (100)	
上級生	147 (92.5)	12 (7.5)	159 (100)	

注3) 数値は度数。()内は上級生および下級生に占める割合。

答えた人数が多かった(『携帯の電話番号』: $\chi^2(1) = 13.497, p < .001$, 『パソコンのメールアドレス』: $\chi^2(1) = 14.652, p < .001$, 『携帯のメールアドレス』: $\chi^2(1) = 13.840, p < .001$, 『出身校(小学校・中学校・高等学校)』: $\chi^2(1) = 10.131, p < .01$).

『携帯の電話番号』は、「伝える」と答えた下級生が41人(26.6%), 上級生が16人(10.0%), 「伝えない」と答えた下級生が113人(73.4%), 上級生が144人(90.0%), 『パソコンのメールアドレス』は、「伝える」と答えた下級生が48人(32.0%), 上級生が21人(13.2%), 「伝えない」と答えた下級生が102人(78.0%), 上級生が138人(86.8%), 『携帯のメールアドレス』は、「伝える」と答えた下級生が51人(33.1%), 上級生が23人(14.6%), 「伝えない」と答えた下級生が103人(66.9%), 上級生が135人(85.4%), 『出身校(小学校・中学校・高等学校)』は、「伝える」と答えた下級生が146人(94.2%), 上級生が131人(81.9%), 「伝えない」と答えた下級生が9人(5.8%), 上級生が29人(18.1%)であった。

4 考察

分析の結果, 個人情報のうち, 住所や電話番号, メールアドレスといった他者が自分自身にアクセスする際に用いられる個人情報については, 上級生は, 他者に伝えることに抵抗を感じ, 伝えないという判断がされ, 開示に対して慎重になるということが明らかとなった。つまり, 臨床心理学系の専門教育を受けたことで, これらの情報を開示することが心理専門職として, また職業倫理上, 適切ではないと判断されるようになり, 開示への抵抗感を強め, 開示しないという選択につながっていくのではないかと考えられる。

Kitchnerのモデルでは, 専門家の倫理的意思決定は, まず直感的なレベルで行われるとされている⁹⁾。これは, 人々が通常の生活の中で学習する「すべき・すべきでない」という信念や, 価値観, 経験, 倫理についての知識, 道徳的判断力の発達等を基に行われる判断である⁹⁾。今回の研究でとりあげた個人情報のうち, 『下宿先の住所』, 『帰省先の住所』, 『帰省先の電話番号』, 『携帯の電話番号』, 『パソコンのメールアドレス』, 『携帯のメールアドレス』といった他者が自分自身にアクセスする際に用いられる情報については, 上級生であっても下級生であっても「抵抗あり」「伝えない」と判断する人数が多く, なかでも『下宿先の住所』, 『帰省先の住所』, 『帰省先の電話番号』については臨床心理学系の専門教育を受けている上級生の方が「抵抗あり」「伝えない」という判断が多くなるという変化はみられ

なかった。つまり、専門教育を受けている長さではなく、日常生活のなかで一定のレベルの関係性にならないと開示しない情報であるという、通常の生活なかで学習されてきた一般的な判断のもとに判断される内容でもあったと考えられる。

『氏名』、『生年月日』、『家族構成』、『所属する大学・学科』、『趣味』、『好きな芸能人』などは、伝えることに抵抗がなく、伝えると判断され、かつ専門教育を受ける長さによってもその判断が高められるという変化はみられなかった。これらの内容は、自身のおかれている背景や価値観、考え方に関わる内容であり、その人の人となりを理解することができる情報と考えられる。初期の段階での心理専門職の自己開示は、慎重なクライアントの自己開示を抑制することになり¹⁰⁾、自己開示にはタイミングが決定的な意味をもつとされている。本研究で設定された場面は実習初日であり、患者との関わりをもち始める初期の段階である。この時期に、自身の背景や価値観、考え方に関わるような内容を自己開示することは適切とはいえない。それにも関わらず、開示に抵抗がなく、伝えると判断され、かつ、専門教育を受ける長さによってもその判断に変化がみられなかったことは、心理専門職としての倫理的な判断が十分にできていなかった可能性が考えられる。

また、『下宿先の住所』、『帰省先の住所』、『アルバイトをしている場所』などを開示することは、開示した相手がその場所にアクセス可能となり、直接顔を合わせる可能性が高い個人情報である。これらの内容については、専門教育を受ける長さによって判断が変化しないということが明らかとなった。『下宿先の住所』、『帰省先の住所』については、判断が変化しないものの、他者に伝えることに専門教育を受ける前から抵抗があり、伝えないと判断されていた。その一方で、相手に開示することで直接顔を合

わせる可能性がある『アルバイトしている場所』については、専門教育を受ける期間によって判断が変化しないだけでなく、専門教育を受ける前から開示することに抵抗がなく、伝えると判断されていた。このような情報が開示されると、日常生活のなかで支援者と開示した相手が接する可能性が高くなる。開示した相手が患者とすると、通常の専門的關係以外の関係や役割が加わることになり、心理治療を進める上で倫理的に適切といえないと考えられる。よって、開示の適切性を判断する際に必要な基準や考え方について、より専門的な教育を行う必要があると考えられる。

金沢はいくつかの先行研究より、心理専門職は、倫理綱領や倫理原則などに基づいて「何をすべきか」はわかるが、実際にそのように行動するとは限らず、むしろ、実務経験、個人的な価値観や感情、その場の現実的な状況などに基づいて実際の行動を行うことが多いことを明らかにし、職業倫理について知っていることと実際に行うこととは必ずしも一致しないということを指摘している⁹⁾。また、職業倫理教育においては、知識獲得を主眼とするのではなく、現実場面での行動の仕方や判断力を養うことが必要と考えられると指摘されている¹¹⁾。よって、今後は、心理専門職として大学教育を受けている学生が、専門職側の個人情報の開示についての倫理的な規範意識を高めるためには、現実場面での行動の仕方や判断力を養う教育システムや教育課程での学習が進められるよう検討することが必要と考えられる。

謝 辞

本調査を実施するにあたって、貴重な時間を割いて調査に協力いただいた対象者の方に心から感謝します。

本研究は平成23年度川崎医療福祉大学医療福祉研究費の助成を受けて実施された。

注1) 2006年以降について文献検索を行ったが、当研究の問題に直接的に関連する研究論文を見つけることができなかった。医療現場や実習場面において重要なテーマであることを考慮し、本論では研究が進んでいないことや報告が少ないという点については言及しなかった。

文 献

- 1) 榎本博明：自己開示の心理学的研究。初版，北大路書房，京都，序章，160-203，1997。
- 2) V・J・ダーレガ，S・メッツ，S・ペトロニオ，S・T・マーグリズ，齊藤勇監訳：人が心を開くとき・閉ざすとき－自己開示の心理学。初版，金子書房，東京，9-18，141-175，1999。
(Derlega VJ, Metts S, Petronio S and Margulis ST : *Self-Disclosure*. Sage Publications, United States, London, 1993.)
- 3) 大見サキエ：患者－看護者間における相互の自己開示－面接調査による看護者の意識－。日本看護学教育学誌，15(1)，73-86，2005。
- 4) 竹内由美：大学生の友人関係における自己開示と孤独感の関係。心理相談センター年報，6，15-22，2011。
- 5) 大見サキエ：対人関係能力としての看護学生のオープンナー特性の検討－一般大学・看護大学・看護専門学生の学校間・学年間の比較－。日本看護研究学会雑誌，26(2)，19-33，2003。

- 6) Deering CG : To speak or not to speak? *The American Journal of Nursing*, **99**(1), 34-39, 1999.
- 7) Anderson SC and Mandell DL : The use of self-disclosure by professional social workers. *Social Casework. Journal of Contemporary Social Work*, **70**(5), 259-267, 1989.
- 8) 金沢吉展 : 臨床心理学の倫理を学ぶ, 初版, 東京大学出版, 東京, 65-90, 2006.
- 9) 金沢吉展 : 臨床心理学における職業倫理的意思決定に関する基礎的研究 : 倫理的意思決定モデルの検討. 明治学院大学心理臨床センター研究紀要, **2**, 3-19, 2004.
- 10) Derlega VJ and Chaikin AL : Neuroticism and disclosure reciprocity. *Journal of Consulting & Clinical Psychology*, **43**, 13-19, 1975.
- 11) 金沢吉典 : 心理臨床・カウンセリング学習者を対象とした職業倫理教育 その効果と参加者の感想内容の分析から. 心理臨床学研究, **20**(2), 180-191, 2002.

(平成25年6月3日受理)

Analysis of University Students' Attitudes to Self-disclosure
in Practical Training at Medical Institutions.
– A Comparison by Personal Information and by School Year –

Yuko TAKEI, Yuri NAKAMURA, Kenji TAKAO,
Manabu MIZUKO and Norihito YAMADA

(Accepted Jun. 3, 2013)

Key words : self-disclosure, practical training

Correspondence to : Yuko TAKEI

Department of Clinical Psychology
Faculty of Health and Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
E-Mail : takei@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.23, No.1, 2013 145 – 152)